

[007] 中国文学論集表紙奥付等

<http://hdl.handle.net/2324/9876>

出版情報：中国文学論集. 7, 1978-06-20. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：



編集後記

私が九大文学部に在籍して以来すでに十年が経過した。入学直後には米軍機が電算機センターへ墜落し、全学あげて米領事館へ抗議を行なった。同時に過激派学生による大学体制批判が盛んとなり、学生が無期限ストを決議するなど、大学教育が大混乱を来した時期であった。私はほとんど傍観者であったが、それでも経験の浅い私にとっては、客観的に社会を見つめる良い機会を得たように思う。その後私は浜教授のご紹介で、中文研究室の矢嶋助手にお会いし、書物に取り囲まれた学究生活が別に存在することを知らされ、岡村教授のもとで中国文学を専攻することにした。当時研究室は大学院生四名、学部生二名の小人数で、私は学部の授業の予習に掛かり切りだった苦い記憶が残っている。また先生や先輩たちから可愛がられた甘い記憶もある。しかし学園紛争の余燼は私の学部生時代を通じてくすぶり続け、まだいくらか人間関係にもわだかまりが残っていた。

近年進学生定員制が設けられ、中文研究室にも毎年五六名ずつ進学し、五十三年三月時点では、岡村、林田、劉先生のもとで大学院生五名、学部生十四名が学問に励んでいる。私はこの間に大学院を修了して助手になっていたが、これらの恩師、学友たちに教えられる所多大であった。私は近ごろ学生に向かって「今の研究室はいい」と言っている。それは学園紛争によって壊された人間相互の信頼を再び取りもどした今の大学の姿に対する喜びの気持からであり、同時にまた学生数の少なかった昔に比べ、切磋琢磨に適當な学生数の揃った、今の研究室に対する讚美の気持からである。私も遂

に長年通い慣れた母校を去ることになったが、最後に我が研究室の今後の発展を祝したい。なお次期助手には新進気鋭の竹村則行氏が就任された。会員、読者各位には私同様ご厚情を賜るようお願いしたい。

(阿部泰記)

中国文学論集 第七号

昭和五十三年六月十五日印刷

昭和五十三年六月二十日発行

福岡市東区箱崎 九州大学文学部内
編集兼 九州大学中国文学会

発行者 代表者 岡村 繁
振替口座 福岡三三五〇七番

福岡市東区箱崎ふ頭平百四番四号
印刷所 川島弘文社
代表者 川島道昭